第２回生駒市総合計画審議会（第三部会）会議録

開催日時　令和５年５月８日（月）　１３：３０～１６：００

開催場所　生駒市役所　401・402会議室

出席者

（ 委 員 ）高取部会長、大谷委員、松山委員、藤尾委員、上山委員

（事務局）坂谷市長公室次長、増田企画政策課企画官、牧井企画政策課課長補佐、
桐谷企画政策課係員、岩川企画政策課係員

（担当課）松田教育こども部次長、大畑幼保こども園課長、小林幼保こども園課課長補佐、
角井子育て支援総合センター所長、澤辺子育て支援総合センター主幹、
花山教育指導課長、中田教育指導課課長補佐、山本教育総務課長、
桐坂教育総務課課長補佐、清水生涯学習課長、井川生涯学習課課長補佐、
西野図書館長、錦図書館課課長、西スポーツ振興課長

議事内容

(1)各小分野の検証

(2)その他

【 事 務 局 】　（開会宣告、配布資料確認）

以下、発言要旨

Ｎｏ．２１２　子ども・子育て支援

【大谷委員】　コミュニティスクールを幼稚園に導入しているところは、全国でも少なく、生駒市が先行して進めることはとても良い。

今後どのように活かしていくか。また、導入することのメリットは何があると感じているか。

【幼保こども園課】　比較的園児数が少ない俵口幼稚園となばた幼稚園で、今年度からコミュニティスクールを導入している。今後、公教育である幼稚園としてどのように存続していくべきか、地域協議会の議論を経て教育委員会が再編に係る方向性を示し、令和４年度から地域の方々や保護者の方々も交えて話合いをしている。

園児数が減っている中でも、子ども達にとっては、集団の中での育ちが大切であり、その中で協同性を育てていかなければいけないと考え、令和4年度に地域園協働本部「えん・くろす」として、地域、保護者、園と取り組みを進めた。

英語教室や書き方教室などの意見を出し合って進めてきたが、現在のメンバーで続けていけるのか、組織的に確立しないと持続できないのではないかという意見もあり、今年度からコミュニティスクールに移行した。

【大谷委員】　運営委員は何人か。

【幼保こども園課】　幼稚園の規模にもよるが１０名程度である。

【松山委員】　昔の地域ぐるみ活動が、コミュニティスクールいう形で小学校単位に変化していった。今回、幼稚園にコミュニティスクールを取り入れることで、担い手の確保が難しくなるのではないかと懸念している。

【幼保こども園課】　運営委員には、小学校と兼務されている方もいる。幼稚園が中心になり、以前から園でボランティアをしている方や、地域の見守り活動をしている方などと調整しメンバーが決まった。

【大谷委員】　メンバーには、必ずしも団体の長を選ぶ必要はない。団体の長は、小学校や中学校のコミュニティスクールで役員をしていることが多いため、副会長やその他の役員などを選んでいった方が、負担は少なくなる。団体の長以外に依頼することは失礼ではない。地域での取り組みを進めるうえで、多くの方に関わってほしいという想いを伝えれば良い。団体との繋がりを活用できると思う。

【高取部会長】　「えん・くろす」というネーミングに込められた想いは何か。

【幼保こども園課】　幼稚「園」と人の「縁」、幼稚園と地域の人がクロスする場所になれば、そして、幼稚園と何かを掛け合わせて面白いことができればという思いが込められている。また、最終的には市内の公立園にも、その取り

組みを広げていきたい。

【松山委員】　ファミリーサポート事業の担い手不足についても同様である。地域で担い手を確保することが難しくなってくると懸念している。

【子育て支援総合センター】　援助会員の募集は、市から自治会に広報し、昨年度からは教育委員会の「すぐーる」という保護者連絡システムを活用し、依頼会員と援助会員ともに募集している。

最近は、実際にサポートを受けてきた人が、次はその恩返しをしたいと、依頼会員から援助会員に変わる事例がある。また、隙間時間でサポートできることがあればと、講習を受けて援助会員として登録する小学生の保護者が出てきている。隙間時間を活かす形式で担い手を増やしていくことを考えていきたい。

【藤尾委員】　高齢の分野で活動している人が、子育て分野で活動したいと思っている可能性がある。逆もしかり。地域共生社会という社会的な潮流もあるので、広い視野で検討を進めてほしい。

高齢者が複数の活動を掛け持ちしていることがある。団体に所属している人数は多いが、事業が重なると人数がそろわないことがある。

私がボランティアを始めた頃は、３０代や４０代の人が中心だったが、現在は６０代や７０代の人が多い。数年先に継続できるかどうかという点が常に不安である。せっかく立ち上がった現在の仕組みを大切にして、良い形で５年、１０年継続していくことを頑張っていただきたい。

【上山委員】　子どもが小学生の間は自宅にいることが多いが、中学生になるとフルタイムで働きだす親が多いため、隙間時間で活動することも難しい可能性がある。

【高取部会長】　保育について、最近、発達障がいなどの支援が必要な人が増えていると聞くが、実際はどうか。また、小学校では特別支援学級のような対応があるが、保育の段階ではどのような対応になるか。

【幼保こども園課】　現場からは、支援が必要な子どもが増えていると聞いている。特に公立の幼稚園は、そういった子どもを受け入れており、保護者とも連携を図りながら、担当の先生を加配している。民間の保育園でも、国の補助制度等もあり加配しているところがある。

【高取部会長】　専門知識や資格を持っている人はいるのか。

【幼保こども園課】　発達が気になる就学前の児童の保護者に向けた出張相談事業である「とことこ相談」では、専門員がおり相談を受けている。また、園の先生も受け入れにあたって心配なことなどを相談できる。

生駒小学校に通級指導教室「ことばの教室」があり、これまでは就学前の子どもで言葉の発達が気になる場合は通っていたが、言語聴覚士の資格を持っている相談員が園に出向く仕組みであり、普段通う園で発達の相談を受けることができる。

【高取部会長】　今後は、何らかの資格を持った人が各園に配置が義務付けられることになっていくのか。支援が必要な子どもが増えてくると、発達障がいなどの専門知識がない保育士では対応できないのではないか。

また、保護者が発達障がいを認めないということも考えられる。

【上山委員】　子ども家庭センターは、発達障がいのサポート以外にも、DV被害やヤングケアラーなどもサポートするのか。

【子育て支援総合センター】　子ども家庭センターは、児童福祉法の改正により令和６年の４月から努力義務で設置するものであり、就学前の母子保健と児童福祉の分野で連携するものである。現状、母子保健は福祉健康部の健康課、児童福祉関係は子どもサポートセンターで対応しており、心理士や社会福祉士、看護師、保健師といった専門職を配置している。DVやヤングケアラーについても、家庭児童相談という形式で相談を受けている。

また、家庭児童相談でも、発達障がいについて相談されることもあるが、専門的な知識を有する職員がいないため、療育施設の案内などを行っている。

【松山委員】　ファミリーサポート事業の認知度が上がらないのは、コロナ禍でほとんど活動できなかったからだと思う。ただし、実感度が下がるのには、他の原因があるのではないか。周知方法についても、市民は興味があることは見るが、あまり興味ないものはほとんど見ていない。広報の仕方などいろいろ改善できる。

【子育て支援総合センター】　子育て支援総合センターの所管としては「みっきランド」や「はばたきみっき」が緊急事態宣言や市独自の緊急警報によって、閉鎖や人数制限せざるを得なかった。

また、この３年間でファミリーサポート事業の依頼人数もかなり増えており、里帰り出産ができないなどの理由でサポートを求める声は多かった。ショートステイについても、利用に際してPCR検査を受ける必要があるなどの厳しい条件が、利用者の伸びにつながらない要因だと思っている。

周知方法については、担い手や利用者それぞれでターゲットは異なるので、今後は工夫していく。

【松山委員】　「みっきランド」について、利用者がある程度固定されており、新規の方は少ないのではないか。

【子育て支援総合センター】　現在は、妊婦も利用できる施設になっており、健康課とタイアップして出産前に「みっきランド」を知ってもらっている。また、実際に利用されている人からも話を聞きながら、いつでも使える場所であることを周知している。他にも周知方法はあると思うため、取り組んでいきたい。

Ｎｏ．２２１　学校教育

【大谷委員】　コミュニティスクールについて、活発に活動しているからこそ、学校による差が出てくるのではないかと思う。各学校へのサポート体制について、年度末に連絡会があるとのことであるが、前を向いてスタートできるよう年度初めにアクションを起こした方が良いと思うがどうか。

【教育指導課】　現時点では、１学期に研修等は予定していない。年度末に、地域と学校の取組の発表や、横展開を進めるために各学校に事例等を冊子で配布

し周知している。

【大谷委員】　運営協議会に委員会の先生が参加し、進め方や会議の内容について指導やアドバイスをすることはないのか。また、県のコミュニティスクールのアドバイザーに参加を求めないのか。

【教育指導課】　各校長がメンバーを招集しているものであり、委員会や県のコミュニティスクールのアドバイザーは参加していない。

ただし、学校から依頼があれば参加は可能であるので、様子を見て後押しをしていきたい。

【大谷委員】　放課後子ども教室は学校で運営しているか。また、その頻度と対象学年はどうか。

【教育指導課】　子ども達の居場所を作ることを目的に、それぞれの校区で運営団体を作り、市から委託している。活動頻度は週に一回程度、年間３０回ぐらいを目安に、小学１年生から６年生までを対象としている。低学年の利用が多い。

財源に関しては、市と県、国で３分の１ずつ補助金を交付しており、活動費や消耗品費で活用している。

【藤尾委員】　放課後子ども教室の取組に関して、誰が活躍しているのか把握出来ていない。地域に情報を届けることで、地域の協力も得やすいと感じる。一部の人だけで運営している印象があるので、より一層地域に開かれると良い。

【教育指導課】　情報発信については、放課後子ども教室だよりのようなものがあると良いのではないかと感じた

【大谷委員】　学校だより等に情報を掲載することで、様々な人材が入れるような仕組みになるのではないか。また、生駒市の場合は、学校教育から行動を起こすことで波及していくと思う。情報提供については、新しい媒体で発信することは大変なため、既存のものを活用し、１行でも２行でも毎

回掲載することで、目に届くことも出てくると思う。活躍の場を多く作ることも一つの仕掛けだと思う。

地域の人が学校コーディネーターになっているため、その人が地域への声掛けなどで支援してくれると学校負担は減る。それが、コミュニティスクールの利点の一つである。

【高取部会長】　市から事業として団体やNPO法人に委託契約しているのか。また、ガイドライン等であるべき姿を統一しているか。

【教育指導課】　地域の放課後子ども教室としての団体と委託契約をしている。代表や会計などの役職を決めるなど、組織化していただいている。それ以外に囲碁教室や読み聞かせ、絵画教室など各教室での活動内容は、団体で設けることもある。放課後子ども教室の交流会を行っており、地域にも発信できる形で紹介したい。事業開始から２、３年のため、今後も少しずつ活動は広がっていくと思う。

【大谷委員】　ヤングケアラーについて、現在は経過観察を行っているとのことであるが、子ども達が、家族の世話をして学習に支障が出たり、登校に支障が出る状況が顕在化しており、近年社会的に注目されている。これまでは、親の世話をすることが偉いという考え方であったが、現在はそういった子どもたちを社会が支える仕組みに移行している。

また、ヤングケアラーは、親の世話していることが当たり前と思い、助けてくれるところはない、自分がやらねばならぬという意識を持っていることが多い。外部からの気付きは難しく、子ども達に気付いてもらうよう周知することが必要である。民生委員などの関わりから判明することもあるが、相当の進んでしまった状況だと思う。子供たちがヤングケアラーについて知るような機会を、今後作っていただきたい。

【教育指導課】　ヤングケアラーについては、毎年県が調査をしており、その中で家事や兄弟姉妹の世話、介護を週３日以上３時間から７時間しているか、その中で遅刻や欠席が多いか、その悩みを相談できる人がるかなどをチェックしている。その結果から、支援対象者の情報等が市に届くので、対応している。

また、市では児童生徒１人に１台端末を配っており、デスクトップに悩み相談窓口のショートカットを表示している。

【藤尾委員】　自分が子どもの頃は、親の助けをしていることに喜びを感じる時代だった。現在も、子どもと親が感じる実感を図ることは難しく、周囲からはヤングケアラーと思われる状況でも、当事者が幸せだと思っていることもあるのではないか。その場合、ヤングケアラーの認定が難しい。子どもの頃にヤングケアラーというレッテルを貼られ、その先の人生の中で親子関係などに影響がでてくることもあるだろう。どうサポートしていくのかが大切である。

【教育指導課】　子どもが罪悪感を持ってしまうこと、親が子どもを責めてしまうことなど、これから市が進める重層的支援体制整備の枠組みで支援していく。

【大谷委員】　高齢者の介護も、当初は社会に任せることに対して抵抗があったが、現在は当たり前になっている。ヤングケアラーの支援についても、世間の意識を変えていくしかない。また、学校でフォローしていかないといけない部分は大きいと思う。

【藤尾委員】　ヤングケアラーについても、民生委員へは情報は入ってくるのか。

【松山委員】　地域の方が気づいて、民生委員に相談する過程で情報が入ってくることがある。

【高取部会長】　多くの課が連携する必要があると思うが、どのように進めるのか。

【教育指導課】　学校は子どものケアが中心である。相談しやすいように支えになることが学校の役割だが、親のサポートになると福祉の分野になってくる。重層的支援の取組でサポートを続ける。

【松山委員】　自校式通級指導教室推進事業の内容は。

【教育指導課】　生駒小学校にあった「ことばの教室」が、通級指導教室に変更となった。各校から生駒小学校へ通う必要があるため、移動時間や保護者による送迎など負担が大きく、自校式の通級指導教室の整備を進めている。

今年は６名の先生を確保し、通級指導にあたっている。各校の先生が他の学校を回ることによって、各学校で同じ指導ができる拠点校方式を取り入れている。今後も指導員の増加を目指す。

【松山委員】　教育支援施設について、建物の耐震に問題があり、使用できないとなっているが、今後、改修していくのか。または、廃止するのか。

【教育指導課】　まだ決まってない。教育支援施設にあった通級指導教室は、既に各学校に移っている。次の場所等、今後の検討課題だとは思っている。

【大谷委員】　通級指導教室は、学力のクラスとコミュニケーションのクラスに分かれているのか。

【教育指導課】　それぞれの子どもに適した個別指導であり、ソーシャルスキルトレーニングなどを指導している。また、スキルを持った先生を増やしていくため、特別支援の先生にも指導に入ってもらい、スキルを学んでもらっている。

【高取部会長】　通学路の安全性について、どのように対応しているかまた、ブロック壁が崩れそうな箇所があれば、直してもらえるのか。

【教育総務課】　毎年、各学校から通学路の危険な箇所を市の教育委員会へ報告してもらい、学校と道路部局、警察と現地調査を行った後に、防犯面も含め改善している。民間のブロック塀については、直接改善命令を出すことはできないため、建築課から危険性と改善を依頼する文書を渡している。ただ、受け入れられない場合もあるため、安全性の確保のため、学校と相談して通学路を変更することも考える。

【松山委員】　ブロック塀の改修に補助は出ないのか。

【教育総務課】　補助制度はあり、実際に改修に至った事例もある。もし崩れた場合に所有者の責任が問われる可能性もあるため、情報提供をしていく。

Ｎｏ．２２２　青少年

【藤尾委員】　あすなろ会の取り組みは初めて知ったが、良い取組であり喜ばしく思う。どんな活動しているのかを教えてほしい。

また、様々な場所で活躍すれば、若い人もそれを見て頑張ろうと思うのではないか。

【生涯学習課】　あすなろ会の歴史は長く、５０年近く続いている。

昔は各地域の子ども会に会員を派遣して活動支援を行っていたが、最近は派遣のニーズもあまりなく会員である中高生の時間的な制約もあり、目立った活動ができていない。

現在は、生涯学習課で実施しているサマーセミナーの授業で先生をしたり、運営スタッフとして活動しているほか、市子ども会育成連絡協議会（市子連）の事業でも補助スタッフとして活動している。

【藤尾委員】　やる気を喚起する取組をしてほしい。リーダー格になる人をピックアップし、事業計画のようなものを作っていくなど、参加者の自主性だけではなく大人が仕向けていくことをしないといけない。組織ができたが、活動内容がないということはもったいない。常に大人が先陣に立ち、若い人が刺激を受けるような取り組みを計画してほしい。

青年団でも、祭りになったら自分がやらないといけない、自分が太鼓を叩くというのが長年の慣例であり、年上に怒られ、後輩を育てながら続いてきた。しかし、青年団も解散してしまい、地域の活動をしないという風潮がある。子ども会や青年団、老人会も学校へボランティアに行っているような、地域体制を目に見える形でしていかないとわからない。

【大谷委員】　あすなろ会を知って、地域住民が協力して欲しいと思った場合は、どこで手続きするのか。行政の取組にだけ参加しているのか。

【生涯学習課】　案件があれば、話を聞いて繋ぐことはできるが、今のところそのような話がない状況である。

【大谷委員】　学校の部活のような運営もできるのではないか。行政が実施している安心感もあり、参加しやすく、リーダー格になってくれる人が育っていくと思う。ただし、活躍する場所を誰が提供するか、派遣する方法を誰が調整するのか、といった仕組みは作る必要がある。活動を多くの市民に知ってもらうことで、自己肯定感や自己有用感が育っていく機会を作ることができる。そういった意味でも、大きなメリットを生み出す組織だと思う。

【藤尾委員】　自治会でのイベントにボランティアで来てもらうなど、活躍の場はある。それを仕掛けていくのは、生涯学習課だと思う。

【高取部会長】　この分野に限ったことではないが、あすなろ会のような取組は、最初の勢いが失速したりするものも多い。あすなろ会においても、保護者の関わりが重要だと感じるがどうか。

【生涯学習課】　市子連がサポートしているが、人員体制の課題もあり難しいところもある。また、市の事業であることもあり、保護者のサポートを前提としたものとはしていない。

【高取部会長】　スクールボランティアやファミリーサポートなど、地域住民のボランティア精神を求めるものが多い一方で、子ども会は衰退していくということにギャップを感じる。

子ども会が衰退する理由は、役員への負担などではなく、負のイメージが先行しているからではないか。行政では、子ども会をどのように捉えているのか。

【生涯学習課】　地域の異年齢の子どもの集団で、様々な交流や活動を通して子どもが成長することは、貴重な体験であり、子ども会のメリットは大きい。

ただし、従来通りの運営方法は時代にあっておらず、検討する必要があると思う。

【大谷委員】　極論であるが、市内の子ども会がなくなることは問題なのか。昔からの組織が今なお続いているが、社会や子どもたちのニーズも変わっている。子ども会という組織に固執しなくても、体験や交流の場を提供する組織や団体があれば、子どもの成長に良い影響を与える。違う組織に作り変えてもよいのではないか。

【生涯学習課】　子ども会という組織にはこだわらない。自治会単位では、子どもが少ない場合もあるため、複数の自治会で子ども会を合併したり、小学校区単位で運営したり、地域の実情に合わせたさまざまな形式が考えられる。何よりも子どもの成長のために好影響を与える活動が重要である。

【藤尾委員】　新興住宅地で、独自に子ども会を作っているところはたくさんある。しかし、市民自治を運営している側としては、地元の子ども会に登録している人にイベントへの参加を募集する。登録の有無を問わず、参加したい人が参加できる形がいいが、線引きする例が散見される。

また、老人会や自治会、青年団の活動が重複し負担が大きく、担い手がいない現状がある。地域なった運営方法が必要である。

【高取部会長】　子ども会というスタイルに固執するような時代ではない。

ただし、自然消滅ではなく他の子ども会と合併するなどの終わり方を示し、また、続けるのであればテコ入れをする必要があると思う。

【生涯学習課】　地域にあったやり方で、子どものためになる活動ができればよい。

現在、校区単位で取り組みを検討している小学校の事例などをもとに、新しいモデルを水平展開できればと考えている。

【大谷委員】　生駒市に子ども会はいくつあるか。

【生涯学習課】　市子連に登録している子ども会は７団体あるが、登録せずに活動しているところも多くある。

Ｎｏ．３３１　生涯学習・スポーツ

【藤尾委員】　高齢者の自立支援事業を長年実施しており、図書館の紙芝居を活用している。知っている話でも、年代関係なく耳から入ってくる心地よさを感じる。いろんな紙芝居を用意し、図書館から読み聞かせのボランティアを派遣するなどをしてもらえると楽しいと思う。

【図書館】　紙芝居は、子どものものと思っていたが、高齢者の評判が良い。ボランティアがたくさん借りており、図書館にも高齢者紙芝居のコーナー設置している。子ども向けの紙芝居は多く出版されているが、高齢者向けの紙芝居はなかなか出版されない。

読み聞かせや音訳については、現在でも出前を行っている。いろいろな場所で声掛けをしており、活用いただきたい。

【藤尾委員】　そういった場で、あすなろ会の若い人が紙芝居を持ってきてくれると、高齢者は孫が読んでくれたように感じて喜ぶ。そのような機会があればよい。

【松山委員】　図書館は、本を読むだけではなくいろいろな形で広がっている。

中地区健康まちづくり協議会は、開館前の３０分間で朝活読得会を実施している。そういった活動に図書館という場を提供してもらえると、訪れた人も本を借りて帰ろうと思うのではないか。

【大谷委員】　生駒市の図書館は、いろいろな取り組みをしており、素晴らしい。小学生が本を読んで高齢者に読み聞かせること良いと思う。本を読んでもらう経験はあるが、相手に読み聞かせる経験がない子どもにとって、しっかり読み込んだり、選書する段階で多くの本と出会える機会になるため、夏休み中など単発のイベントでも良いと思う。

また、まちかど図書室や借りた本を返却するポストを増やすことで、図書館との距離感は近づくのではないか。

【図書館】　利用者は、借りる時は読む意欲があるが、返却は非常に面倒であるため、返却を楽にしたいと思っている。返却ポスト等を得設置したいが、回収する人件費や物流のコストが高く、ハードルが高い。タイミングを

見て実現していきたい。

【高取部会長】　市民活動推進センターで実施している男の定年前セミナーのようなプランは生涯学習課では行っていないのか。

【生涯学習課】　主にシニア世代が対象になるが、セカンドライフがより長くなっている中で充実感や安心感を持って過ごせるように、啓発活動をしていきたいと思う。まずは寿大学の学生を対象に考えているが、一般市民や世代を考慮し対象者を広げていった方がいいと思っている。

【高取部会長】　リタイアしてから、急に地域に出るということはハードルが高い。５０代後半からセカンドライフに向けて準備しておかないといけないと思うが、一人では良い案が浮かばず、何かヒントになるようなことをやってもらえると、発見があって嬉しいと思う。

高齢者でも、人との繋がりがなくなってくると体が弱っていくことがあり、特に男性はリタイアしてから何かを始めようと思ってもアイディアがない。

【藤尾委員】　昔は、５０代の男性も多く料理教室に参加していたが、定年延長により現在は高齢者が多いと感じる。５０代くらいの参加者を集めることが重要であるが、仕事で参加が難しい。生駒はベッドタウンなので、地域への関心や愛着が薄い人が多いと感じる。

【高取部会長】　生涯学習の経験から、地域や人のための活動につながることがベストだが、そこまで固い話ではなく、生きがいを見つけるヒントが見つかればいいと思う。

【生涯学習課】　生涯学習を通して何か気づきを得ることが、まず必要だと考えている。学びを地域に還元することは、ゴールの一つではあるが、そのプロセスを含め自己成長、自己実現のきっかけとなることに、生涯学習の意味があると思う。

【松山委員】　総合型地域スポーツクラブに関して、加入者数等は伸び悩んでいるのか。

【スポーツ振興課】　ずっと伸びてきていたがコロナ禍で減少し、現在は徐々にコロナ禍以前の数値に戻りつつある。

【松山委員】　学校のクラブ活動が難しくなり、総合型地域スポーツクラブとタイアップしようと思うと、ある程度その数が増えていいかないと難しいのではないか。

【スポーツ振興課】　クラブ活動については、地域移行ではなく、新しい形を作るということで検討している。総合型地域スポーツクラブが事業主体として受け皿の一つになると思う。

Ｎｏ．３３２　歴史・文化振興

【松山委員】　音楽祭について、若い人の出演が難しいのか。どんどこ祭りのアマチュアパフォーマーなど、若い人が出演すると若い人が見に来て盛り上がると思う。若年層が参加しやすくなるよう工夫できないか。

【生涯学習課】　質の高い音楽をできるだけ多くの方に提供することを目的としており、実際に若いミュージシャンによる公演もある。企画提案において音楽のジャンルは問わないが、結果的に若年層が好んで聞くジャンルの公演がないことも、若年者の来場につながりにくい原因かと思う。

【高取部会長】　音楽祭には、芸能人をゲストで呼ぶこともあるのか。客寄せではないが、若者を集客するには有名人を呼んできっかけを作ることも必要ではないか。

【生涯学習課】　市民が企画提案する事業であり、出演者等も提案次第であるが、委託料も上限があるため、有名人を起用することは現実的に難しい面もある。なお、指定管理者が自主事業として行う公演では芸能人が出演するものもある。

【 事 務 局 】　　（庶務連絡、閉会宣告）

―― 了 ――